

なり、可申様もなし。定めて其方の取りかはしたるものなるべし。無市も手柄なり。急ぎ勝家の實檢に入れらるべしと被申。承ると申して、組頭又同道して柳瀬へ行き、勝家の實檢に入る。勝家また大に悦び、定めて其の方無市に取かひめされたるものなるべし。其の方事今に初めざる事也といへども、今日の働一人の手柄也とて、刀を下され、無市にも脇指を下さる。其の時の様子を今思へば、彼の組頭に取りかはしたるやうすに極りたる躰也。組頭も匠作の右の如く宣ひて、引手物も頭に御腰物、無市には御脇差を賜はれども、則御意の如く取かひしたる顔にて、引出物頂戴したり。後の證據にも右の引出物が成るなれば、餘りに武功の者を頼めば、何時もかやうに、若き者は必ず功者に取りはしたるに成るものなり。進退心得有るべき事なりと、無市後まで語りたると也。さて無市は後に前田家へ來り、金の番鳥を被仰付たる者也。せがれ二人あり。久米之助・彌三右衛門と云ふ。兩人共に死して跡絶えたりといへり。又有澤永貞の古兵談殘囊集に云ふ。近藤無一之助が中川瀬兵衛の首を取りたる時は、廿一歳の時なりといへり。

無一後は加州にて五百石を取り、金番鳥役を勤めたり。其の子の代に跡目不立、浪人と成り、江戸へ出で身代をかせぐ内、中川佐渡守久恒の先祖瀬兵衛清秀の驗を擧げたる者の子孫ならば召抱え度し。但し其首尾何とぞ慥なる證據あらば可召抱と被申由にて、延寶の末か天和の頃なるか、永貞在江戸の時近付に成り、無一が咄を聞度しといふ。有澤采女長俊金番鳥役の初めに、無一之助も同役たりしに依つて、後々まで有澤孫作俊澄方へも心安く咄し居たり。依りて首尾前後の様子を覺書にし遣したりけるに、其覺書を以て中川家へ二百石に身代在付きたり。とあり。按ずるに、吾が舊藩にて金番鳥役といふは、使番役をいへり。捨棄名言記にも、昔は御使番を金のばんとりとて、武功ある者に被仰付とあり。藩國官職通考に、微妙公の時、金番取役と云ふあり。即ち浪華之役林彌次右衛門・平岡志摩助等十八人あり。其の職大概使番に同じ。譜代の者を使番とし、新參を金番取役とす。金番取役は、軍装の時金の番取を着するゆゑ、名目とするなりとぞ。されば、近藤無市を金番鳥役を命ぜられしも、彼の志津嶽合戦の時、

中川清秀が首を獲たる武功を賞し命ぜられしと聞ゆ。清秀も勇士也。日本人物史勇士部に、中川清秀者攝州人也。築荒木壘居焉。始屬荒木村重。荒木與和田惟政。戰争而不止。一日荒木立榜於路傍。若有獲和田首者。厚賞焉。清秀懷其榜而歸。其翌日和田陣于糠塚。荒木也于馬塚挑戰。清秀進先登。獲和田首。荒木遂得勝矣。後荒木以有岡城叛。信長屢攻之。又以弘通耶蘇宗之事。令中川・高山屬麾下。中川・高山奉命而降焉。於是荒木力屈矣。秀吉與柴田勝家構難之時。使清秀守志津嶽寨。高山亦在其北寨。佐久間盛政欲襲志津嶽。高山見其大軍。計寡難當衆。引兵而還于木本。又遣使於清秀。示去寨之事。清秀不肯。與佐久間戰而死。とあり。平次七世の祖小兵衛盛昌が曰く、大西道治涼空比丘曰く、延寶年中下馬將軍と字する大老酒井雅樂頭忠清の息女は、中川瀬兵衛清秀五代の孫中川佐渡守久恒の嫡男因幡守久通の室なり。日本人物史中川清秀傳に、高山見其大軍。計寡難當衆。引兵而還于木本。又遣使於清秀。示去寨之事。清秀不肯。與佐久間戰而死。是其の事實と齟齬し、偽書たるよしにて、作者山科長安塾居

を命ぜられ、刻行をなしける書肆等悉く罪せらる。此の時世に流布すべからずとて、板木を焼かしめらる。といへり。今按ずるに、有澤永貞の古兵談に、延寶の末か天和の頃か、近藤無一が子孫ならば召抱度しとの事にて、無一が子孫中川佐渡守久恒へ二百石に有付きたりとあるも、延寶の頃か恒主の五世の祖瀬兵衛清秀が事蹟穿鑿の事に依りてならんか。おもふに、彼の高山右近高房は、寡衆に敵し難きとて援けず。故に中川清秀死せるを、秀吉公怒りて高山が封を除かる。依りて吾が藩祖利家卿高山を招き、二萬石を與へられ、剃髮して南坊と稱せしが、利家卿の代に切支丹たるに依りて南蠻國へ送られたり。さて中川清秀が首級を獲たる近藤無市も、吾が藩士と成りて五百石賜はり、金番鳥役を勤めけり。又彼の日本人物史を撰びたる山科長安も、中川氏の爲に一時罪せられしが、後吾が藩に扶持せられ、近藤無市と共に金澤に居住すといへり。高山以下三人共不思議の値遇といふべし。

○古 道

此の地邊をば古道と惣名の如く呼べるは、いにしへ宮腰往